

## 2026年度東京学芸大学ホームカミングデー講演会 こうして仏像はよみがえる 文化財保存修理の実像を知ろう！

講師：門脇 豊氏（文化財保存修理技術者，本学美術科卒業生）

【日 時】 2026年10月31日 15:30～17:00

【会 場】 東京学芸大学中央2号館(南講義棟)410教室

どなたでも自由に参加できます。入場無料です。

会場へのアクセス: JR国分寺駅北口または武蔵小金井駅北口から京王バス利用 学芸大学正門下車  
JR国分寺駅北口から銀河鉄道バス利用 学芸大学北門下車



## キャンパスガイド④

### 附属学校で行う図書館学の授業

学芸大学の東門から続く樺並木の左手奥に、東京学芸大学附属小金井中学校があります。今回、私は、同校の図書館で実施された教育支援課程生涯学習・文化遺産教育コースの「図書館情報学演習Ⅰ」という授業の様子取材しました。

学校図書館というと、本を借りたり読んだりする場所を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。しかし、この授業で学芸大生が学んでいるのは、本の管理や配架といった図書館業務だけではなく、生徒や学校司書の方とともに、学校図書館が人と人をつなぐ新たな活動の場となるような授業実践を行っています。この授業の特徴は、一度きりの体験活動ではなく、半年から一年という長い期間にわたって継続的に行われるところにあります。また、この活動は主に昼休みに行われるため、授業中とは異なる中学生の生き生きとした姿に出会うことができます。本の話で盛り上がり、学校生活について語り合ったり、前回の活動の続きを一緒に考えたり、そうしたふれあいの積み重ねが、大学生と中学生の信頼関係を築いていきます。（次ページに続く）



東門よりキャンパスを眺望 左手が附属小金井中学校

取材当日は、七夕にちなんだ短冊型のPOPづくりが行われていました。本の中から「おすすめ」の言葉を選び出し、さらにそれを大学生とともに推敲を加えた文に仕立て上げ、中学生が短冊に書き込みます。いわば、本を通して新しい人の出会いと学びとが生み出されるという企画です。この日は小金井中の図書館にたえず笑い声が響いていました。この活動を見ていて私よりも印象的だったのは、大学生が「教える人」ではなく、「ともに考える人」として関わっていたことです。大学生は中学生の隣に座り、「それいいね！」などと言って中学生のアイデアを受け止めながら、一緒に飾り付ける言葉を考えていきます。こうした活動の中では年齢差を感じさせない温かい雰囲気醸成され、中学生も「こんなのはどう？」と安心して自分の意見を出していました。

この授業を担当しておられる前田稔先生が、「本を介して言葉を引き出してみよう」と問題提起をされると、大学生は、中学生が何をしたいと思っているのか、どんなことに興味をもっているのかに耳を傾け、その思いをどう実現するかを一緒に考えていきます。今回のこの企画も大学生が考えたものではなく、一緒に活動した中学生の提案から始まったそうです。短冊型のPOPづくりにおいても、重視されていたのは中学生自身の言葉でした。「どこがおもしろかったのか」「誰に読んでほしいのか」という中学生一人ひとりの思いを言葉にしていきます。そのため大学生はその答えを「教える」のではなく、いろいろな問い掛けを通して中学生の思いを引き出そうと努力します。

私もこれまで受けてきた前田先生の授業の中で、実践を通して自ら考え、試行錯誤を重ねることが求められてきました。中学生から思いがけないアイデアが生まれたり、予想していた反応が返ってこなかったりす

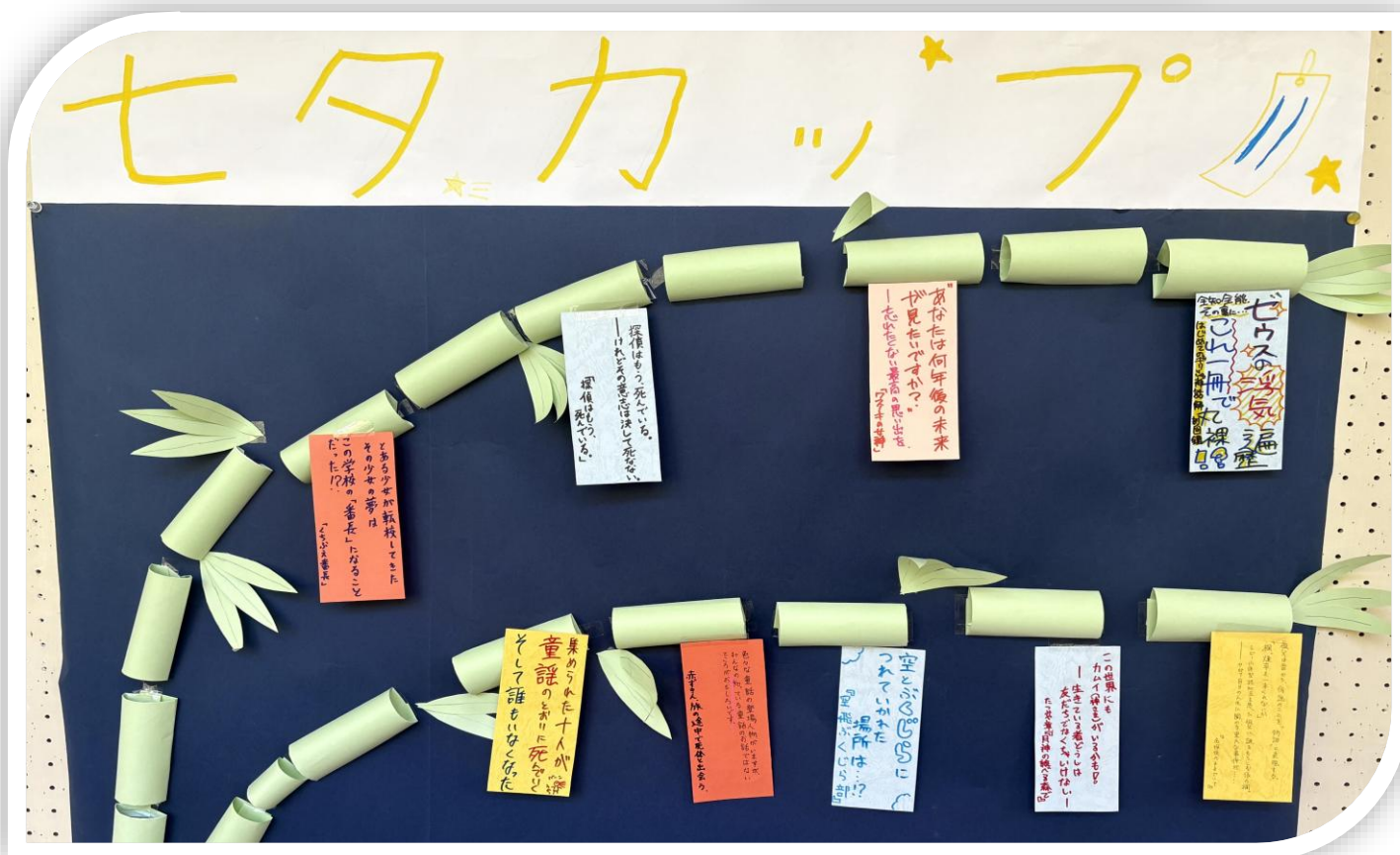
るたびに、大学生も自分たちの関わり方を振り返り、次の活動を考えていきます。大学生が一方的に中学生を支えるのではなく、中学生とのふれあいを通して自身の考えを深めていくという活動が紡がれていきます。こうした活動は、いつも思い通りに進むわけではありません。相手によって反応は異なり、準備したことがうまくいかない時もあります。しかし、その一つ一つの経験が次の実践に生かされていきます。

前田先生は、普段から「思いがけない出会いを大切にしてほしい」「思い通りにいかないときこそ得られる学びがあります」と繰り返し語っておられます。私が先生の授業で何度も耳にしてきた言葉ですが、今回の取材では、その言葉が実際の活動の中で実践されていました。中学生との対話の中から新しい企画が生まれ、予定通りにいかない出来事も次の実践へとつながっていく。冒頭で述べたように、学校図書館は本を読む場所であるだけでなく、人と人とが出会い、互いの考えを交わしながら新しいものを生み出していく学びの場所でもあるということを実感しました。

「教育とは知識を一方向に伝えることではなく、人との関わりの中でともに創り上げていく営みである」—この授業は、こうした教育論を地で行くような授業でした。（M25-8321 松山明日香）



制作風景



完成したポップ

# 協働から生まれる創造的な学び

—「みんなで発見！ワークショップフェス」を通して—

2026年7月5日の日曜日、東京学芸大学の中央4号館で「2026東京学芸大Explayground『みんなで発見！ワークショップフェス』」が開催されました。このイベントは、東京学芸大Explayground推進機構と協働する形を取って行われた学芸大学大学院の「教育支援協働学概論」という授業の一環でもありました。この授業を受講する大学院生は、いくつかのグループに分かれてExplaygroundの各ラボと協働し、一般市民向けワークショップの企画・実施に取り組みます。当日来場した子どもの数は294名、大人の参加者も268名に達し、合計562名もの人たちによって、会場はとてにぎやかな「学びの遊び場」へと変貌しました。

会場には、自然、食、ものづくり、身体、言葉、VRなど、さまざまなテーマを扱う12の参加体験型ワークショップが並び、参加者は探検マップを手に、興味のあるワークショップを探します。一つのテーマにじっくり取り組む子もいれば、いくつものワークショップを巡る子もいます。子どもたちだけでなく、保護者や学生も一緒になって、「見る」「つくる」「試す」「考える」さまざまな活動を展開しました。

このようなフェスが実現できた背景には、学芸大学で展開されているExplaygroundの活動があります。学

芸大学では、「遊び」と「学び」をつなぐというコンセプトのもと、さまざまな「ラボ」が生まれています。各ラボは、立ち上げの背景やテーマ、関わる人々もさまざまですが、いずれも創造力豊かな活動を活発に展開しています。今回のフェスでは、こうした活動と大学院の授業をつなぐことによって、地域の人びとを巻き込んで「学び」のあり方を探る貴重な機会になりました。個性的なテーマを掲げる異なる活動が、同じ場所で同時に展開されていることも、このフェスの面白さの一つでした。

たとえば、大学の北西部にある農園を活用した「くいしんぼうラボ」の農園ツアーでは、子どもたちが農園内を歩き回り、学生たちとさまざまな農作物ができる様子を熱心に観察していました。普段、学芸大生や附属学校の生徒たちの環境学習の場となっている農園は、新たな参加者たちと出会うことで、さらに幅広い学びの場となったようです。子どもたちからは鋭い質問が矢のように飛んできます。その中には思いもよらない質問もあって、大学院生はその対応にてんやわんやです。ただ、一見何気ないこうした場で求められる専門的な知識や対応力は、大学院生の「学びの再検証」を要求する、限りなく大きなものであることを痛感しました。



にぎわうシャボン玉コーナー

一方、今回のフェスでは新たな課題も浮かび上がりました。人数制限を設けたワークショップの中には、開始から1時間もしないうちに定員に達したものもあり、参加した子どもたちからは「もっと参加したかった」という声も聞かれました。どの参加者も希望する活動を体験できるようにするにはどうするか、今回の経験を踏まえた検討が必要になりました。予定していた通りに活動するだけでなく、その場で生じた問題への対応を次の実践へつなげていくことも、教育支援協働の学びの一部なのです。

昨年度、私はあるラボの活動に関わり、仲間とともにその企画・運営を経験しましたが、今回はフェス全体の運営に協力することになり、会場設営や来場者の受付、案内役の配置など、その仕事量の多さに驚かされました。しかし、その一方で、ワークショップからワークショップへと楽しそうに移動する子どもや、子どもと一緒に走り回る保護者の姿など、ほほえましい場面に何度も出会うことができました。こうした経験を通して、このような大規模な企画は、多くの人びとの献身的な活動に支えられてこそ成功することを知りました。一言でいうと、協働することの素晴らしさを実感したのです。

今回の企画には562名もの人たちが大学を訪れ、大学で行われる教育活動への関心の高さがうかがえました。大学の近隣地域からだけでなく、都内各地から訪れた人も少なくありませんでした。普段は異なる場所で生活する人々が、ワークショップを介して同じ場所に集まり、ともに活動することによって、新たな創造的な学びが生み出されます。そこでは、大学が地域の人たちに「既成の学び」を一方向的に「提供する」のではなく、参加者たちとの協働を通して「新たな学び」を引き出すことができるのです。

今回のワークショップフェスの中で生まれたたくさんさんの「発見」は、フェスの参加者たちだけでなく、この企画・運営に携わった私たちにとっても貴重なものでした。大学が地域に開かれた学びの場として、そして多様な人と人をつなぐコミュニティの一つとして機能する――そうした可能性を強く感じる一日となりました。（M25-8321 松山明日香）



工作ラボ風景：中学生もスタッフとして参加